

しんねん 新年のごあいさつ

芽室町民の皆様、新年あけましておめでとう
ございます。

皆様におかれましては、ご家族ともども気持ちも新たに、穏やかに希望に満ちた新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、日頃から町政に對しまして深いご理解とご協力を賜り心から感謝申し上げます。

昨年を振り返りますと、未だ完全終息には至っておりませんが「新型コロナウイルス感染症」は落ち着きを見せ、個人的な感覚ではありますが、「コロナ以前にも増して、活動・イベント・会議・行事などが活発になったと思う日々が続きました。

昨年12月、日本漢字検定協会が公募により決定・公表した2024年の「今年の漢字」は「金」でした。昨年はオリンピック開催やMLBでの大谷翔平選手の「金」メダル以上と言ってもいい世界的な活躍もあった一方、政治とカネの問題、闇バイト強盗事件や引き続いている物価高騰なども「金」にまつわることで、多数の応募の理由となったように



す。今年は暗い事件や事故がなく、経済面でも安定した一年になってほしいと願うところです。

毎年の「新年のごあいさつ」では、その年を振り返つての「漢字」ではなく、私の今年に向けた抱負やどうありたいかという考えを漢字一文字で表すこととしており、今回で7回目となりますが、2025年の「漢字」は「進」といたしました。

そもそも町政を推進していく立場ですので「進」という字はありきたりとか、当たり前と感ずるかもしれませんが、昨年過去最高の生産額となったものの経費増も続く農畜産業の持続的推「進」を核とした町経済の推「進」、今後も大きな課題となる「新嵐山再生」「公立芽室病院の経営安定」「まちなか再生」などについては定めた構想、方向性に基づいて、もっと前に、そして具体的に「進」めなければならぬと考えております。

また、デジタル化、ゼロカーボン、新工業団地への立地なども職員や、関係する団体・企業の方々とともに、構想・計画段階からその先の見えるかたちに「進」めなければいけない町政課題だと思っております。

さらに、町民の皆様が安心して暮らしていたために「保健・医療・福祉」「地域や生活」



の環境整備や、未来を担うひとづくりに向けた「教育」「地域コミュニティ」の推「進」にも力を入れていかなければなりません。

たくさん町の町政課題がありますが、これらの「進」み具合が未来の芽室町を創るための大切な取組と考えており、一気に解決できないものもありますが、他の町政課題も含めて一歩でも半歩でも「進」んだ姿を町民の皆さんに実感していただきたいと思います。

例年、町政課題ばかりを申し上げて恐縮ですが、最終的には町民の皆さんが健康で生きがいをもって、楽しく笑顔で暮らすためにどういうまちづくりをしていくのかということに尽きると思っております。そのために微力ではありますが、私自身も健康に留意しながら奮闘してまいります。

町民の皆様におかれましては、まずは「健康第一！」で、さらに、前向きで明るい1年となりますことを心からご祈念申し上げます。年頭のごあいさつとさせていただきます。

芽室町長 手島 旭

持続可能な農業へ

環境保全型農業直接支払交付金

芽室町での取付面積・交付金額(令和5年度実績)

カバークロープ等(緑肥)	105,080a	62,835,300円
堆肥の施用	51,372a	22,603,680円
有機農業	2,791a	3,431,400円

～これらによる環境保全効果～

農地に還元された堆肥やカバークロープの一部は、土壌有機炭素となり、土壌中に貯留されることで地球温暖化防止に貢献しています。また、化学肥料や化学合成農薬を使用しない有機農業の実践や農薬の削減により、地域に様々な生物を育み、生物多様性の保全にも寄与しています。

芽室町の取り組み編

環境保全の取り組み



遠藤農場(報国) 遠藤 昌仁さん



そうだったのが！ 芽室町の農業

畑作

「農業に適した広大な土地と恵まれた気候」芽室町は十勝平野のほぼ中央に位置し、気候は内陸性で晴天日数が年間を通じて多く、夏と冬の寒暖差が大きいことが特徴です。そんな恵まれた気候のもと、小麦、豆類、馬鈴しょ、てん菜の畑作4品のほか、スイートコーン、枝豆、長いも、ごぼうなどを主要作物とする大規模畑作経営と畜産経営が行われています。耕地面積は、2万2822haで芽室町の面積の約4割も占めているんです！

「北海道トップクラスを誇る作付面積・収穫量」ご存じ、スイートコーンは面積・生産量ともに日本有数の産地です。生産量は年間7千トン(加工用・生食用)！寒暖差を生かした、甘みの強いスイートコーンが収穫されます。

そして、芽室町はごぼうもすごいって知ってましたか？生産量は北海道でトップクラスなんです。下層まで柔らかい土が広がっている畑が多いため、ごぼうの生産にも適しているんですね。ブランド品種の「めもろごぼう」も生産されています。

「安心安全なブランド」酪農・畜産では、乳用牛が約7千頭飼養され、年間約3万5千トンの牛乳が生産されており、肉用牛が約1万頭出荷されています。

ブランド牛の「未来めもろごぼう」は、抗生剤の入っていない餌や遺伝子組み換えでない餌により飼養された、安心安全なブランドです。肉豚については、約3万1千頭が出荷されており、厳しい品質基準に合格したブランド豚「SPF豚」も生産しています。

報国で遠藤農場を営む遠藤昌仁さん。37年間、農業に携わり、小麦、豆類、馬鈴しょ、てん菜の畑作4品を育てています。そんな遠藤さんは、約10年前からスマート農業を取り入れ、農作業の効率化・省力化にいち早く取り組みられています。そのきっかけや導入しつからの変化についてお話を伺いました。

スマート農業が労働環境をガラッと変えた今では、エアシッター※1やブロードキャスター※2、GNSS※3と連動した農薬散布機など、さまざまな機械を導入している遠藤さんですが、スマート農業に取り組み始めたきっかけは、10年前にさかのぼるといいます。「自動で操縦するトラクターの実演を見たことが始まりです。トラクターでま

- ※1 空気を利用して効率的に種をまく機械
- ※2 重量計により散布量を自動補正し高精度施肥を可能にした、農薬を散布する機械
- ※3 全球測位衛星システム



▲無駄なく効率的に農業を散布できるように

スマート農業を取り入れることで、農作業の効率化・省力化は劇的に変わったという一種をまく時期や収穫する時期には、家族総出でバタバタしていたものの、今では一人ですべてできるようになった。雲泥の差とその変化を話してくれました。

農業の後継者不足も叫ばれるなか、スマート農業は解決の糸口となるかについてお聞きすると「先進的な機械を操れるか、壊れたときにどうするかなど、違った課題が出てきていることは確かです。ただ、われわれの世代は、農業を始めるとき、トラクターをまっすぐ走らせるところからのスタートでしたが、今では自動でまっすぐ走ってくれるので、昔に比べるとハードルは低いといえます。

スマート農業の取り組みが、持続可能な農業への明るい材料となってくれることを願います。

芽室町の農業は、多様な作物と先進技術が融合し、豊かな実りをもたらしつつあります。この特集を通じて、わが町の農業をもっと身近に感じてもらえたら幸いです。

